

史 跡 福 山 城 IX

平成 3 年度 発掘調査概要報告

1992・3

北海道松前町教育委員会

序

国指定史跡福山城は、我が国最後の旧式築城による城郭であります。昭和50年度に保存管理計画を策定し、環境整備事業に係る遺構確認調査は昭和55年度以降実施してきております。以来、内堀・本丸表御殿・櫓手門・外堀・南西側の隅櫓跡などの発掘調査を実施してまいりました。文献史料と一致するように数多くの遺構と遺物が発見されており、かつての福山城の姿が次第に明らかになってきております。とりわけ、内堀の調査終了後は、その成果をもとに復元・整備され、本丸周辺の景観は一新いたしました。

本年度は、今後修復工事が予定されている石垣部分と、外堀の確認調査を行いました。その結果、上部の石垣はほぼ完全に取り払われておりましたが、根石は良好な状態で残されていました。また外堀も下部の石組がよく保存されておりました。

地中に眠るこうした遺構を見るとき、先人の高度の技術と労苦に対し、ただ、敬服する次第であります。調査結果をもとに、環境整備事業として石垣の修復工事を施工しましたが、次年度以降も更に継続して事業を進めていきたいものと考えております。

ここに平成3年度の発掘調査の概要をまとめるにあたり、本書がより多くの方々に活用されることを期待しております。

この事業を実施する上で、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係各機関、諸先生方に多大のご指導、ご助言をいただき深く感謝する次第であります。

平成4年3月

松前町教育委員会

教育長 吉 田 禎 介

例 言

1. 本書は、史跡福山城の平成3年度環境整備事業に伴う遺構確認調査の概要報告書である。
2. 本年度の調査は、平成3年9月18日から平成4年1月31日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者 松前町教育委員会教育長 吉田 慎介

調査担当者 松前町教育委員会 久保 泰

調査事務局 松前町教育委員会文化財課

調査参加者 赤松順子、川村節子、河田敬子、和田映子、工藤満理子、斉藤雅子、佐藤伸子、小西美佐子、石井トメ子、樺井栄子、松田弘子、須藤幸子、得藤勝江、川村典子、三浦文子

3. 本書の編集、執筆、写真撮影は久保があたった。
4. 遺構実測図整理、トレースは赤松があたった。
5. 本年度の調査、整理作業にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導、ご協力をいただいた。（順不同、敬称略）

文化庁記念物課、道教委文化課、渡島教育局、松前町史編纂室、青森県埋文センター
加藤允彦、田中哲雄、平井聖、浅井潤子、渡辺達三、桑原真人、木村尚俊、永田富智

6. 調査によって得られた諸記録、資料は松前町教育委員会が保管する。

目 次

I 調査目的及び調査方法	5	2. 石垣天端	16
1. 調査の目的	5	3. 外 堀	17
2. 調査方法	5	III 出土遺物	22
II 遺 構	8	IV ま と め	27
1. 石 垣	8		

図 版 目 次

第1図 史跡位置図	4	第7図 根石及び根掘り跡実測図	16
第2図 調査位置図	6	第8図 1～4地点土層図	18
第3図 遺構位置図	10	第9図 外堀実測図	20
第4図 縄張図(部分)	11	第10図 出土遺物 (1)	23
第5図 石垣実測図	14	第11図 " (2)	24
第6図 石垣根石実測図	15	第12図 " (3)	25

写真図版目次

図版1 既修理箇所根石調査状況		図版7 ビット1、E地点石列	
E地点根石調査状況		図版8 1地点、5地点	
図版2 A地点、C地点		図版9 外堀調査状況外堀	
図版3 G地点根石状況 }		(北側より)	
H地点根石状況 }		図版10 外堀埋没状況、岩盤に見える	
図版4 I地点根掘り跡の状況		タガネの痕跡	
J地点根石の残存状況		図版11 出土遺物 (1)	
図版5 E地点堀状況		図版12 " (2)	
(南及び東側より)		図版13 " (3)	
図版6 蛇口及び流し様の遺構			
(東及び南より)			



第1図 位置図

I. 調査目的及び調査方法

1. 調査の目的

国指定史跡福山城の環境整備事業にかかる遺構確認調査は、昭和55年度に開始して以来第10次を数えるに至った。『史跡福山城Ⅰ～Ⅳ』の間、内堀、搦手門の一部、本丸表御殿跡地、南西側の隅櫓、そして夫々の建物遺構に伴う踏施設などが徐々に明らかになってきた。また国庫補助事業ではないが、町の事業として福山城背後の寺町周辺の道路整備を進め、これに伴って町教委では外堀遺構等の事前調査も実施しており、この遺構の状況も明らかにしてきたところであった。調査結果を踏まえ、内堀は復元整備工事を終え、本丸地内の景観は松城小学校の撤去と併せて一段と引き締まりを見せている。また、環境整備事業にかかる石垣修理工事は、ここ数年來かって福山城への登城坂であった馬坂周辺を重点的に施工しており、新たに修復された石垣は付近の景観を一新し、昔時の面影を彷彿させつつある。

今年度の遺構確認調査は、当初は本丸内にあった北東側の隅櫓跡地の確認調査を実施する計画であった。これは、昨年度に南西側の隅櫓跡地を調査したが、文献史料に著わされた櫓と発掘調査の結果でいくつかの喰い違いがあることが分かり、そのため北東側の隅櫓の調査を実施し、その結果によって福山城の隅櫓のあり方を考えてみようというものであった。

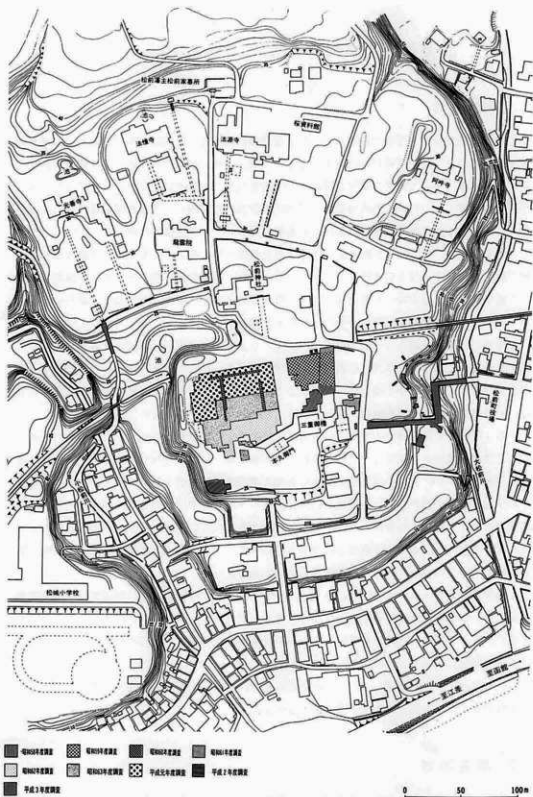
一方、町部局では史跡地内を通る町道馬坂線の改良工事を計画していた。この事業の経緯については今年度併せて刊行した『松城遺跡・史跡福山城』の中で述べておいたのでここでは詳しく記載しないが、史跡の現状変更の許可を得て事前調査を平成3年7月1日から9月17日までの予定で調査を進めていた。調査の結果、現道の下部から階段状の遺構や排水溝、馬坂の南側部分に沿って石積みの側溝、外堀や土居の一部とみられる石垣の一部などが発見された。外堀には、馬坂門へと通ずる架橋部分の遺構も確認されていた。町道馬坂線の下部が、遺構の遺存状況が思いの外良好であることが分かったのである。

この間、9月4・5日両日には、第2回の史跡福山城保存整備審議会が開催され、審議委員の先生方、文化庁加藤主任調査官より現地指導をいただいた。調査状況を踏まえ、外堀の調査区域の拡張、今年度以降施行を予定している石垣修理箇所の根石の状況の確認調査、併せて石垣天端の把握に務めるよう指示をいただいた。

これを受けて、当初予定していた調査予算190万円を外堀、石垣調査に振り向け、町道馬坂線の事前調査の終了を待って調査を進めることとした。

2. 調査方法

今年度の調査区は町道馬坂線に隣接する区域であり、既に設定してあった調査区を拡張する



第2図 調査位置図

ことでこれを利用した。この調査区は、従来の調査区（5 m×5 m）に方位等で合致させてあるものである。また、調査区の名称は、町道馬坂線の名称を引き継いでいくものとしている。

平成元・2年度に石垣修理工事が終了した部分の根石の確認については、第3図にあるように任意の地点A～Dの4ヶ所にテストピットを開削した。危険を生じない範囲で岩盤もしくは旧地盤まで掘り下げるものとし、7.4㎡の面積を調査した。平成3年度以降に石垣修理工事を予定している箇所は、E～Jの6ヶ所56.7㎡のテストピットを開削した。確認範囲は、縄張図等の表現では昨年度の修理箇所付近からは直線状に延び、外堀のコーナー付近で鋭角で西へ折れるように石垣は示されている。（第4図参照）今回の調査では、この鋭角に折れる地点まで確認することを主眼とした。また、石垣の天端レベル把握のためには1～5の5ヶ所、17.7㎡のテストピットを開削した。町道寺町線内から明らかになった外堀については、その延長部53.4㎡について調査した。以上の調査関係位置は第3図に示したとおりであり、町道寺町線関係分についても併せて示しておいたので参照いただきたい。

既工事分については工事終了後の石垣下部の状況、根石の状況の調査を実施した。今後の石垣工事予定地分については石垣根石の有無、根石が存在しない場合には石垣の抜取り痕、根掘りの状況調査に務めることとした。E・F区については、崩落している土砂を除去したところ石垣の遺存状況が比較的良好であり、また、石垣に付帯しそうな遺構が発見されたため若干の面積を拡張した。この調査区については、調査終了後に工事が予定されていたため必要最少限の埋めもととし、工事予定範囲分については在来の石垣と後世の積み直しの石垣の区分をし後世の石垣については取り外しのうえ工事を実施するよう指示した。

外堀については、植栽されている桜、フジを移植のうえ、重機によって排土できる部分については可能な限りこれを使用した。外堀の延長部の状況、両側の天端レベルの把握、石積の技法等の調査につとめた。

遺構確認後は、平面図、正面図、土層図等を作図、写真撮影ののち埋めもとをした。

II 遺 構

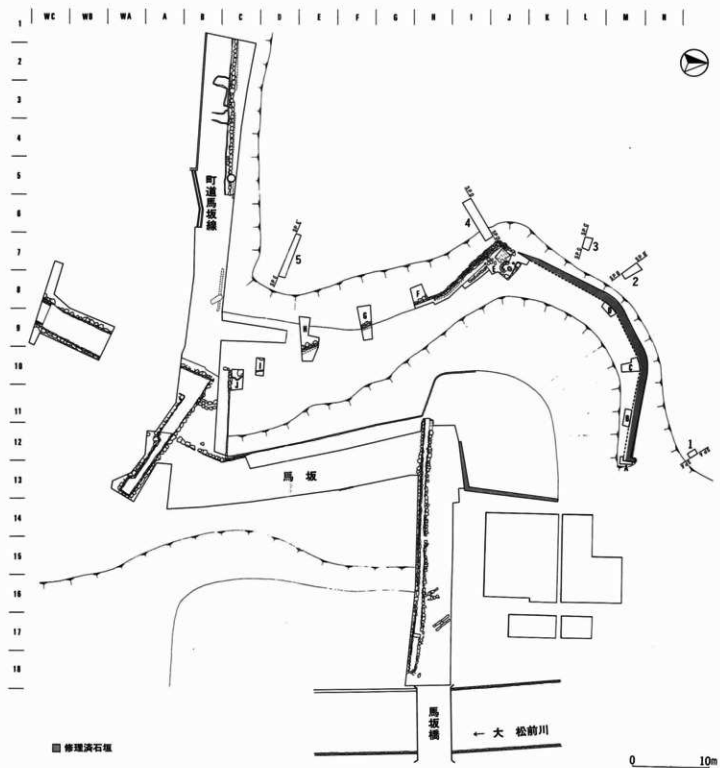
調査によって石垣、石垣の天端、外堀を明らかにした。以下、順に概要を記していくことにする。

1. 石 垣

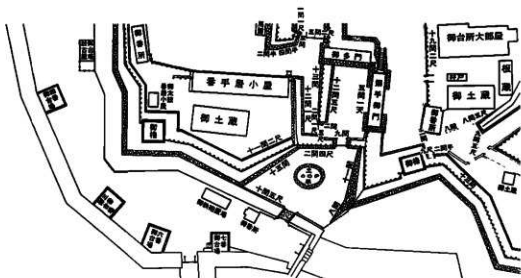
いくつかの史料によって福山城の石垣の状態を見ると、外堀に面した西側、湯殿沢側ではほとんど石垣は築かれていなかったらしい。これは湯殿沢が天然の要害をなしており、本丸地域との比高差が大きいこと、幅の広い外堀が設けられており、あえて石垣を設ける必要がなかったものとみられる。これに対し、南、東、北側にはそれぞれ石垣が築かれていた。明治6年から8年にかけての福山城取り壊しの際には、ほとんどの石垣は建物とともに取り払われてしまい、かつての状態を今に伝えている石垣は極めて少ないようである。現在、我々が築城当時の石垣そのものと認めてよいものは、本丸御門周辺の石垣である。これに加えて、今回の町道馬坂線の調査で明らかになった、仮称馬坂西側石垣と呼んだもの程度であろう。このほかの石垣は、旧来の石垣を後世に積み替えたものか、あるいは若干位置を変え、全く新しく積み上げられたものである。例えば松前神社裏手の石垣は、位置こそ基本的には変わってはいないものの、何度か崩落してその度に修理をくり返し、結果的に石全体が小さくなってしまい、築城当時の様子を伝えていないものである。また、旧太田病院（字松城149番地）周辺の石垣も、一見したところ在来のものに思えるが、細かく観察すると何度か積み替えた様子が窺え、石積の手法も地下に埋もれている在来のものに比較すると、明らかに後世のものと識別がつくのである。

在来の石垣積の手法は、先ず、緑色凝灰岩（グリーンタフ）による切込刺の手法によること。現在我々が見る福山城の石垣より、少なくとも一回り以上も大きな石を素材としていること。基本的には谷積手法を用い、布積や田の字積になるような積み方をしていないこと。石の噛み合わせがしっかりしており、毛抜合端のような手法はとっていない。裏込めはしっかりしており、川（海）砂利を栗石に用い、この中には多量の陶磁器片を含んでおり、裏込めの奥行きが深い。最下部に据えられる石は粗く仕上げられ、これより上部の間知石は面（つら）の仕上げがなされていること。こうした福山城の石垣の特色を念頭に置きつつ調査を進めると、築城時の石垣とその後に積み替えられた石垣との判別が容易にできるのである。

平成元・2年度には字松城117-1番地内の石垣延長36mを修理している。このあたりの石垣は縄張図に示しておいたように、福山城の東側の防禦をなしていたものである。この縄張図では石垣の高さは不明であるが、現地の地形的な条件から見ると高さ5m程度にはなりそうな、福山城の中でも最も高く積み上げられた箇所のようなものである。ただし、これより北側については



第3図 遺構位置図



第4図 縄張図（部分 松前神社所蔵）

直接大松前川に面するため、どの程度の石垣が積まれたものか全く不明である。

指示にしたがい、既修理箇所の根石の状況について調査してみた。調査地点A～Dのいずれからも根石は発見されなかった。また、基盤層（緑色凝灰岩の風化層）まで掘り下げてみたが根掘り跡も確認できなかった。根掘り跡が追認できなかったことについて、基盤層まで工事の際に擾乱しており、このため判別できなかったとみられる。後になって、この工事関係者から聞いたところでは、根石はあったが修理の際に一度これを抜き取り、最下部からもう一度積み直したとの回答を得ている。このため、根石及び根掘り跡が検出できなかったのである。結果論となるが、工事前の事前調査が必要であったと考える。

今後石垣修理が予定される箇所については図のようにE～Jの調査区を設定した。縄張図では北東側の隅櫓の東側石垣のうち、南西から南東側に折れる部分に相当する。石垣は直線に近く外堀の隅に向かって延び、手前でやや東へ折れるように表現されている。石垣の先端部はかなり鋭角である。この先端部は外堀の隅までは至らず、先端部と外堀隅との間は備か板塀によって繋がれているようである。

調査の結果、E地点では第5図に示したように、石垣が大きく南西から南東側へ折れるコーナー部が発見された。同様にG・H地点では地表からの石垣の状況は全く観察できなかったものの、掘り下げることによって石垣と根掘り跡の様子が分かった。また、I地点では石垣は完全に抜かれていたが、F・G・H地点から直線上に連なる根掘り跡が発見できた。注目されるのはJ地点で、根掘り跡が西へ折れている様子が看取され、根掘り跡の内部に石垣最下部の間知石が1個発見された。石垣として積み上げられる間知石は、外部に向く面だけが表面処理（整形加工）され、他の面は粗仕上げされるのが一般的である。ところがJ地点から発見され

た間知石は略東側と略南側が面取りされた様子が窺える。以上二つの事実は、この石が両面に向けられた石、つまり角に据えられるべき石であることを示している。

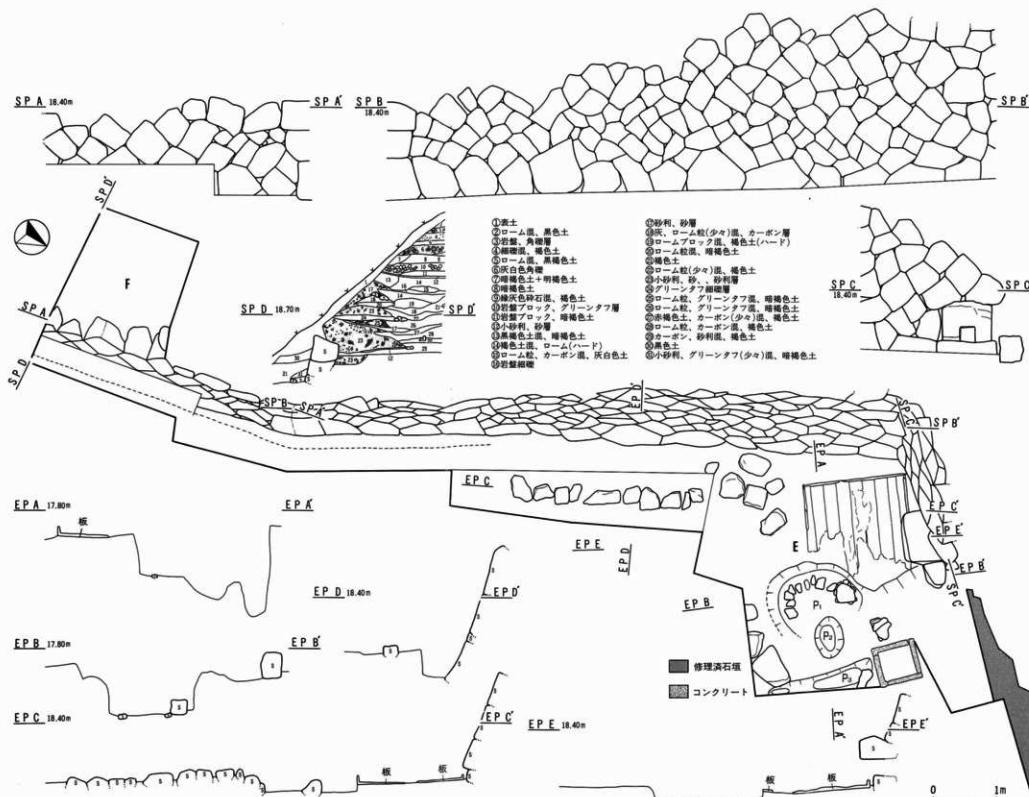
根掘りは基盤の岩盤層を掘り込んでおり、地盤が安定しているためこの中に直に石が据えられている。下部の石は70cm～1m大の石を用いており、2段目以上に積まれている石は合端のしっかりしたものである。こうした点や前述した石垣の特色から見ると、E地点での石の積み方は粗雑であり、極端に小さな石が積み上げられる箇所がある。また「四ツ目」や「目通り」が多く、石垣積みの手法としては稚拙な箇所が多く見受けられる。したがって上部に積まれている石は、築城当時のものではなく後代になって積み上げられたものと考えられる。

石垣の裏込めの状況は各地点で観察できるが、SPD-D'ライン（第5図）ではその状況がよく理解できる。「控」の背後50cm～1mの奥行で、厚さ20～50cmにわたり砂混りの砂利（華大）層や緑色凝灰岩の碎石層を裏込めとしている。調査後に気付いたことであるが、石垣修理のためSPB-B'ラインの石を取り除いたところ、石垣の背後に更に二重となるように緑色凝灰岩の間知石が積まれているらしい。間知石は40cm大で、そう大きなものではなかったが少なくとも2段以上は積み上げられていたらしい。工事中的こともあって拡張して調査はしなかったが「裏積み」の手法をとった石垣であったかもしれない。

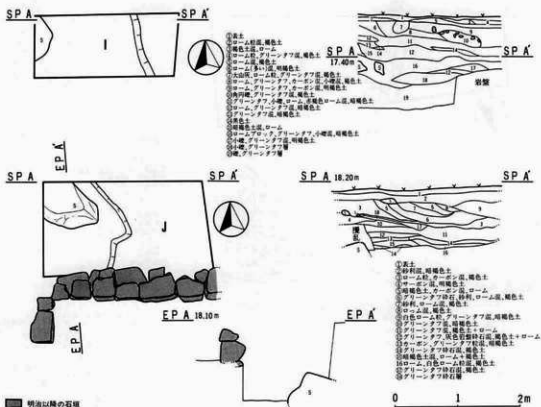
上述のコーナー部から北東側へ1m程の位置から、緑色凝灰石による蛇口（樋門）が発見されている。奥行は不明であったが、高さ65cm、幅80cm大の直方体の石を割り貫いて作っているものであった。水脈が変化したと見え水はこの蛇口の中を通しておらず、蛇口の横や下部から盛んに湧き出していた。この蛇口に付随するように「流し」様の遺構が取り付けられていた。

幅6寸、厚さ1寸程度、長さ5尺以上の板が9枚並び、板材は東側部分が腐朽していたが、おそらく本来は150×180cm程度の規模の流しであったとみられる。この流しの下部は特に作工はされていないようで、ローム混りの土を平坦に均し、その上に板材を敷き並べ組み合わせて流しとしていたようである。

この流し周辺及び下部にはコンクリート製の溜槽と3ヶ所のピットがあった。ピットのうちR₁としたものは明らかに流しよりは古いもので、推定径1.5m程の円形で、確認面からの深さ60cm、底部に20～25cm大の自然礫を半円状に並べてあった。当初は円形であったものが、R₁によって破壊されたのであろう。なお、R₁は出土遺物に多量にガラス等を含み全く新しいものである。R₁の内部からは木材片のような遺物は特に出土していないが、おそらくこのピットのあり方から見て、径1mくらいの桶（樽）様のものが埋められていたのではあるまいか。それが方形の流しが作られるに及んで抜き去られてしまったと考えられる。この蛇口の設けられた場所は、本来自然湧水のある場所で、その水を何らかの目的で溜めておくためにR₁が掘られ、簡単な井が設けられていたものであろう。その後、築城時に石垣が積まれたのに併せて蛇口が設けられ、同時に流しが据え付けられたとみられる。その後、明治以降のある時期に、コンクリート製の溜槽が設置されたのであろう。この湧水の処理は、溜槽の設置によって石組みの排水施設があったかどうかよく分からないが、現在では崖面に自然浸透し、旧道立松前病院看護婦宿



第5図 石塚実測図



第7図 根石及び根堀り跡実測図

含裏手で再び湧き出し、今年度明らかになった馬坂の開溝へと導かれている。なお、流しを被覆していた灰層中には多数の銅釘、銅板が含まれており、こうした遺物を含む灰層は城内の何らかの建物の焼け跡の灰を投棄したが故に形成されたものとみられる。

流し様の遺構の南側に、石垣から約1m離れてこれに沿って、20~40cm大の石が10個ほど並んで発見されている。この石の発見された面は、ほぼ当時の生活面とみられるレベルにあり、石垣と一体となるもののようである。だが、夫々の石の向きは一定しておらず規則性をもっていない。この石列の延長を追って周辺部を拡張してみたが、これ以外には発見されていない。また、抜取痕の状況は不明である。したがって、この遺構の性格については不明としておきたい。

2. 石垣天端

前述した過去2ヶ年の石垣修理工事において、この時点ではまだ石垣の天端レベルを押さえていなかったで、現地形にしたがってこれよりも低いレベルを石垣の仮の天端レベルとしておいた。今回、今後の石垣修理箇所の基礎部分（根石）の確認に併せて、過去の修理部分と今

後の修理箇所についても石垣天端レベルがどうであったか調査することとした。本来であれば石垣に最も近い箇所を調査区に設定すべきであるが、既修理箇所は工事の際にかなり擾乱を受けていると考えられたのでこれを断念した。また、今後の修理箇所についても、石垣の抜き取りによってその部分が崩落しており、石垣から離れた位置を止むを得ず調査区に設定した。

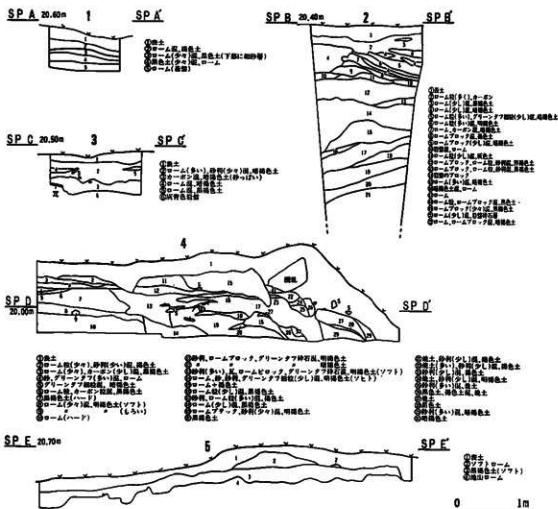
第3図に示した5ヶ所についてテストトレンチを設定した。調査対象地全体に桜等が植栽されており、これらを外しての調査区設定であったため必ずしも等間隔とならず、任意の調査区とならざるを得なかった。各トレンチとも明治以降の擾乱を受けており、良好な堆積状況を示しているものは少なかった。だが、トレンチ1及び4の一部で築城期かそれ以降とみられる生活面レベルが押さえられた。土層観察の結果では、1ではおよそ標高20.10mあたりが生活面レベルとみられる。4の南西側3分の1部分では、20.30mあたりが生活面とみられる。このトレンチでは石垣側（北東側）はかなり擾乱を受けているものの、南西部分からはしっかりとした安定した面が確認できた。他の3ヶ所は、いずれも擾乱・削平を受けて生活面を確認することはできなかった。トレンチ2では容易に基盤層に至らず、現地表下から3m近くまで掘り下げてみたが基盤層には達しなかった。このトレンチから特に遺物は出土していないが、明らかに人為的な盛土（整地）層である。前述したF・G地点のように、石垣背後を版築状に掘き固めて盛土・整地した部分と同様の性格をもつものであろう。

さて、以上のように福山城の存続期には標高20.10～20.30mあたりが一つの面をなしていたことは確かである。過去両年度の事業で修理された石垣の天端レベルは、前年度の終端部で標高19.583m（約19.60m）であった。これに近いトレンチ4では生活面レベルが20.30mであり、約70cmのレベル差が生じていることになる。石垣が積み上げられる時、当時の生活面まで積まれるのが一般的なあり方である。また、意図的に生活レベルより若干下げる場合もあるようである。今回の場合、いずれに該当するか不明であり、指導をいただいた結果、今年度修理の石垣天端は昨年度のものより40cm引き上げる（生活面より30cm低いレベル）こととしておいた。

3. 外 堀

福山城の外堀は城郭の東側を除いて巡っているが、北側では石垣と組み合わされて寺町地域とを画している。西側の湯殿沢に沿った部分は全くの未調査であり、旧福山公園の月琴堀や旅館八重亭（撤去済）の旧池にその名残があるほかは広い谷地（湿地）となっている。地形図で見る限りでは幅20～30mにも達し、かなり幅の広い堀であったようである。本来の形態は石垣を組まず、土堀りのままの堀だったとみられる。旧八重亭前（湯殿沢門）付近からは再び石垣が生まれ、整然とした形態で南側から北東側へと回り、二の丸と三の丸とを画していた。外堀は馬坂門付近で東側へ折れ、堀の水は大松前川へ落されていた。

本調査に先行した町道馬坂線の改良工事に伴う事前調査では、いくつかの遺構とともに外堀の一部が発見されている。南東―北西方向に延長約19mを確認しており、北西側では大きく



第1図 1～4地点土層図

南西方向へ折れ、南東側では一たん堀は閉じていた。この先は未調査であるが、堀は浅くなって続いているものと推定された。この浅くする意味は、同じ深さのままで大松前川へ向かうと堀の水が急激に流れ出てしまい、潭水するという堀本来の目的が失われてしまうからであろう。外堀は上述のコーナー部からは幅が広くなり、天堀あたりではこれまでの幅の2倍以上にはなりそうになっていた。確認された外堀には幅が狭くなる箇所が設けられ、これは縄張図(松前神社所蔵、第4図)に示されるように橋が架かる部分と推定される。前述のように、調査区の拡張によって架橋部の全体が分かったが、これについては別に報告してあるのでそれを参照していただきたい。本書では、南西側に新たに拡張した部分について記述していくものとする。

東側から城内に入るには主として次のようなコースがあった。現町役場裏手の大松前川に架かる馬板橋を渡り、左に側溝を見ながら馬板を登る。側溝に架かる橋を渡ると正面に馬板門が

見える。馬坂門の手前には外堀があり、これを渡って馬坂門を通る。この時に渡るのが今回発見された架橋部分である。門をくぐって三の丸に入り、右に折れて再び外堀を渡る。橋の正面には楕円形に盛られた土手があり、ここに植えられた松を通称三本松（羽休の松）と呼んだという。現在この土手の名残りがあるが、本来の位置かどうか分らず若干動いている可能性もある。この後、門をくぐり、正面に御多門を見、右手の搦手門を通り、内堀を渡ると本丸表御殿に至るのである。今回調査区を設定した位置は、上述したうち外堀に架かる橋のありそうな場所に相当する。例示した縄張図では、木橋に表現されており、橋の幅は堀の幅と同じくらいありそうで、堀に対し直角でなく斜めに取り付くらしい。橋を中心としてこの周辺は、馬坂門からつづく堀が設けられていたようである。

調査の結果、第9図に示したように延長約10mにわたって外堀遺構を検出した。事前調査時に明らかにした外堀と、直線上に繋がるがよく分かる。このうち南西側だけ部分的に最下部まで下げてみたが、このあたりもやはり岩盤を掘り抜き、その後石垣を積んでいる。最下部から、少なくとも3段の石垣は残っているようである。堀を埋める土層の観察によれば、三の丸側の生活面レベルは16.85mであった。おそらく、三の丸側の石垣の天端レベルもこの数値とみてよい。これに対し二の丸側（西側）は、福山城取り壊しが完了した後に新たに道路が作られ削平されたため、生活面のレベルはこの調査範囲からだけでは判断できない。だが、土層を見る限りにおいては三の丸側よりは1mは高いようである。図示したように、外堀部分のみの調査範囲としたため二の丸地域へ至る勾配、周辺の杭跡の様子はよく分らない。だが、石垣の位置、積み上げられた勾配を勘案すると、外堀の幅は4.50m（2間半）かこれよりは大きいものと考えてよい。堀の内部は全体を最下部まで出していないため、橋脚があったものか、存在していたとするならばどのような構造となっていたものか、今回の調査では不明である。

なお、今回検出された外堀は一直線とはならず、南側部では約8°に近い角度で西側に振られている。例示した縄張図ではこうした表現はされておらず、何か意味があるのか今後の調査の課題としておきたい。

Ⅲ. 出土遺物

調査面積が少なかったこともあって、全体的に遺物の出土量も少なかった。そうした中で、比較的遺物の多かったのは外堀とE地点であった。外堀は、昭和期に入ってこの上に民家が建築されたようで、新しい時期の遺物が投棄されていた。形のまとまったものがいくつかあったが、これらは載せていない。特徴的だったのはE地点で、前述したように流し様造構の上構の上には厚さ30cmに及ぶ灰（焼土）層が覆っていた。この層の中に多量の遺物が含まれていた。特に目立ったのは銅板片と銅釘で、銅釘は小さなものが主で長さ2～3cm大のものが多かった。銅板は10cm未満の小片が多く、銅釘が刺さった状態のものがいくつかあった。見落しもあるかと思われるが、採取した銅釘はこの地点だけで360本余に達している。このE地点では、このほか炭火木片、銅瓦かとも思われる遺物も出土している。上部からは後世の遺物がかなり出土していたが、これらは図から除外してある。

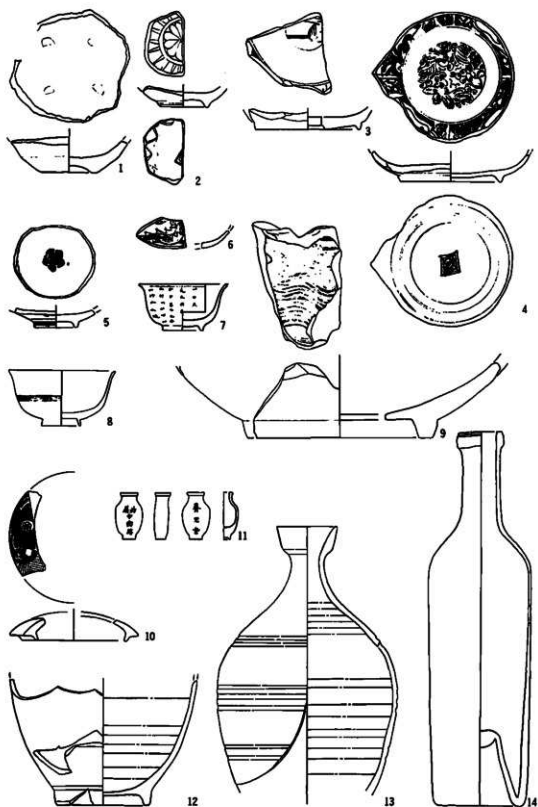
出土遺物には陶磁器類、瓦、金属製品、ガラス製品、自然遺物等があったが、概して明治期以降のものが多かった。以下、概略を紹介していくがここでは比較的古いとみられるものを主に見ていくことにしたい。

1) 陶磁器類

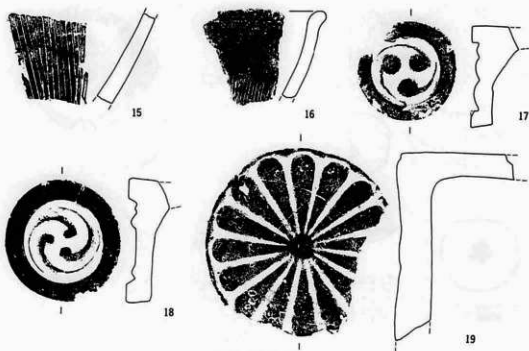
個体としてまとまったもののうち、明治期以前とみられるもののみ抽出して図示した。観察表を付しておいたので、併せて参照していただきたい。1は内面のみ透明釉をかけてあるもの。見込に4ヶ所、胎土目積の痕跡が見える。2は全体に磨耗しており、裏込めの砂利とともに搬入されたもの。3は見込の文様は不明である。胎土はくすんだ灰白色を呈するもの。5は見込

表-1 出土陶磁器等観察表

図版No	写真図版	出土区	類別	器種	計測値(cm)	文 様 等
第10図 1	図版11	堀山城大 2	陶 器	皿	— 4.6 —	唐 津 見込に胎土目地等 透明釉
" 2	"	" 石堀G	磁 器	"	— (3.8) —	見込菊文、外裏二重朝目文 高台純黒釉
" 3	"	" 外 堀	"	"	— 8.4 —	?
" 4	"	" 石堀D	"	"	— 8.0 —	染付花卉文
" 5	"	" " E	"	"	— 3.6 —	見込五弁花文コンニャク印判
" 6	"	" " "	"	"	— — —	明 砂地文・電文
" 7	"	" W C-7.8 ドレンチ	"	碗	7.2 3.4 3.7	瀬戸・美濃 文字文
" 8	"	" 石堀D	"	"	7.6 3.1 4.4	瀬戸・美濃 横線文
" 9	"	" W C-7.8	陶 器	鉢	— (14.8) —	唐 津 二彩かけ
" 10	"	" 石堀G	磁 器	蓋	10.3 — —	色絵 (合わせ部無釉)
" 11	"	" " "	"	薬 瓶	(1.6) 1.1 3.7	
" 12	"	" W C-7.8 ドレンチ	陶 器	徳 利	— (5.3) —	外面透明釉、内面鉄釉、細かい貫入あり
" 13	"	" 石堀D	"	"	— 4.9 —	鉄釉
" 14	"	" W C-8.9	ガラス	瓶	3.6 5.6 29.5	ワイン瓶・壺茶
第11図 15	図版12	" 石堀E	陶 器	楕 鉢		備 前 18世紀代
" 16	"	" " G	"	"		唐 津 18世紀代



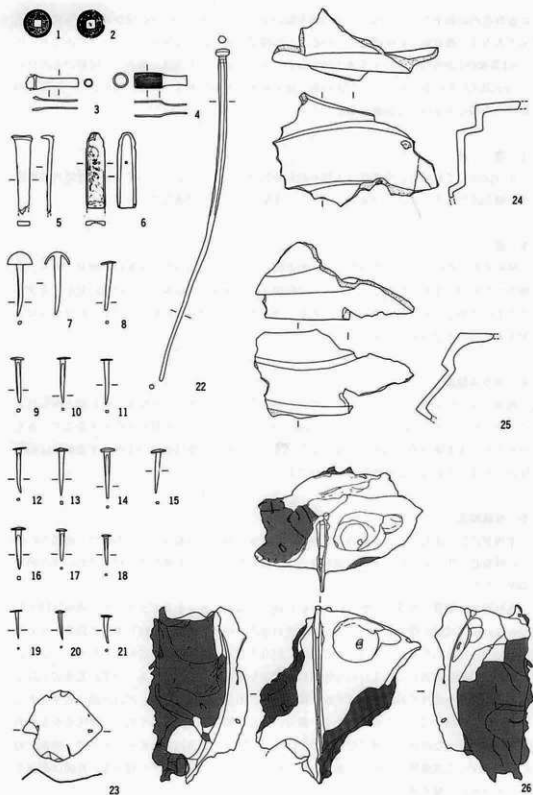
第10图 出土遗物(1)



第11図 出土遺物(2)

表一 2 金属器等観察表

図版No.	写真図版	器種・種別	出土区	長 幅 厚 (cm)	重量(g)	備 考
第12図 1	図版13	寛永通宝	石垣 E	2.29 × 2.28 × 1.10	2.20	延宝(1673~1680)年製
" 2	"	"	" "	2.23 × 2.24 × 1.00	2.30	宝永(1704~1710)年製
" 3	"	煙管 吸口	" "	(4.20) × (1.05) × (1.05)	4.00	真ちゅう 腐食著、欠損
" 4	"	"	" "	4.21 × 1.20 × 1.20	10.50	" 縦線様一部つぶれる
" 5	"	鉄釘	外堀 ^W C ^ニ レ ^ニ ナ	(6.31) × (1.53) × (0.40)	(8.20)	腐食 破損
" 6	"	銅製・飾金具	" W C - R - 9	(6.01) × (1.50) × 1.10	(14.90)	花唐草文様、鍍付着、破損
" 7	"	銅太鼓鉄	石垣 E	(5.30) × 1.92 × 1.90	13.80	
" 8	"	銅釘	"	3.89 × (1.22) × 1.22	(4.10)	和釘
" 9	"	"	"	3.60 × (1.25) × 1.14	(3.20)	" 基部曲がっている
" 10	"	"	"	3.62 × 0.91 × 1.08	2.30	"
" 11	"	"	"	3.63 × 1.11 × 1.11	2.90	"
" 12	"	"	"	3.56 × 1.20 × 0.95	2.30	"
" 13	"	"	"	3.79 × 1.08 × 1.00	2.70	"
" 14	"	"	"	3.63 × (0.90) × 1.08	(1.40)	"
" 15	"	"	"	3.96 × 1.08 × 1.04	3.70	"
" 16	"	"	"	3.40 × 1.14 × 1.06	2.90	"
" 17	"	"	"	2.53 × 0.96 × 0.96	1.50	"
" 18	"	"	"	2.35 × (0.80) × 0.80	(0.90)	"
" 19	"	"	"	2.32 × (1.10) × (0.99)	0.80	"
" 20	"	"	"	2.36 × 0.78 × 0.77	1.00	"
" 21	"	"	石垣 H - 9	2.27 × 0.88 × 0.90	1.20	"
" 22	"	銅製火箸	石垣 E	26.62 × 1.10 × 1.10	44.00	少し歪曲
" 23	"	銅板	"	5.11 × 5.25 × 0.09	(9.20)	全体に腐食し通んでいる
" 24	"	銅瓦 (?)	"	(13.10) × (5.90) × (0.73)	295.0	二次被熱
" 25	"	" (")	"	(13.50) × (6.30) × (0.75)	350.0	"
" 26	"	" (")	"	(14.30) × (13.40) × (8.20)	2695.0	" 銅釘を巻き込む



第12圖 出土遺物(3)

に五弁花の印判手を付した皿。6は明朝末期の皿の破片である。内面に描かれている文様は龍文であろう。高台部に砂が熔着している。この時期の資料は、今年度はこの1点のみであった。7.8は幕末から明治期の瀬戸・美濃の碗である。9は二彩がけの大皿。過去にも同様のものがいくつか出土している。10は色絵段重の蓋。紐の有無は不明である。11は、書かれている文字の意味は不明であるが、中国製の薬ビンであろうか。

2) 播 鉢

2点図示しておいた。今年度は大型の破片資料は出土していない。いずれも18世紀代の唐津系・備前系のもの。16は二次被熱によって、多量の炭火物が付着している。

3) 瓦

破片資料はかなり出土していたが3点のみ図示しておいた。いずれも無軸の壱瓦であり、施釉されたものは出土していない。17・18は軒棧瓦の軒九部。福山城では一般的に見かけるタイプのものである。19は軒九瓦の破片である。今年度初めて発見されたタイプで、16弁からなる菊花文の瓦当となるものである。

4) ガラス製品

板ガラス、ビン類がいくつか出土していたが新しいものが多く、比較的古い形態とみられるワインのビンを中心に1点図示しておいた。気泡がかなり入り込み、左右対称とならず歪んでいるものである。本丸御門西堀石垣の抜取跡から出土した資料に形態は似ているが、本資料には銀化はみられず、それよりはやや新しいものであろう。

5) 金属製品

金属製品には素材別では鉄製品、銅製品、真ちゅう製品、鉛製品などがあつた。前述したように銅製品、中でも銅釘の出土が最も多い。金属製品についても観察表を付しておいたのので参照いただきたい。

製品別では煙管、火箸、釘類（紙を含む）、銃弾、銅板、飾り金具等があつた。銃弾は図示していないが洋式銃の弾丸であり、かなり腐食の進んでいるもので、やはり多量の釘類とともに出土していたものである。注目されるのは、銅瓦とも考えられる銅製品が3点出土している。小片で、しかも破損しているため全体の形状のよく分らないものである。いずれも火災とみられる二次被熱を受けており、やはり銅釘類とともに出土している。24、25は内面に砂を巻き込んでおり、打出しによるものではなく、鋳型に入れて製作されたものである。厚味もかなりあり、火鉢のような単純な形態になるものではない。25はヒレ状の突起をもつもので、重量が約2.7kgと重い。二次被熱のためか、銅釘を5・6本巻き込んでいる様子が窺える。外面は曲線を描いているが、兜の鉢ではない。

Ⅳ. ま と め

今年度の調査によっていくつか新事実が明らかになったが、最後にこれらと、今後の課題を記して若干のまとめとしておきたい。

石垣の天端レベルは、4地点での調査成果から20.30mあたりと考えてよい。ただ、このレベルは例示した縄張図でも分かるように、本丸地域全体のレベルを指すものではない。北東側の隅槽からこれにつづく土塀の設けられた部分、つまり本丸の外部ラインの天端レベルと考えておくべきである。縄張図によれば、土塀の内側には低い石垣が巡り、内部は一段低くなるように表現されている。将来的には隅槽の位置、規模を把握すると同時に土手状に高く表現されている本丸外部ラインを明らかにし、復元していくことも考えてみる必要があろう。

当面修復が予定されている箇所石垣の根石は、既に見たように外堀とのコーナー付近まで把握することができた。J区から発見された根石は、縄張図に示された石垣が鋭角状に折れる箇所の角石と考えてよい。今後はこの角石から搦手門へとつづいて行く石垣の根石が、どの程度保存されているか調査してみる必要があろう。本文では触れておかなかったが、I・J区の西側にトレンチを1本設定している。このトレンチは直ぐ基盤の岩盤にあたってしまう、残念ながら掘取りの痕跡すら残らぬほど削平されてしまっていた。旧検察庁公宅跡地(字松城119番地)付近は、土盛によって平坦地に造成された部分があるようで、こうした部分は遺構の残りが期待持てそうである。

外堀は、寺町付近の調査と今年の2ヶ所にわたる調査によってかなり明らかにできた。今回の調査では架橋部、コーナー部と堀の石垣の遺存状況が比較的良好であることが分かり、外堀の幅もおおよそ推定できた。また、三の丸側の堀石垣の天端レベルも把握できた。が、これに伴って今後の課題が多きく増えてきた。これらをいくつか記しておく。

まず、当面、南東隅槽(以下、太鼓槽とする)南側あたりまで全面発掘調査を実施して見る必要があろう。この付近は、史跡地内でも車輛の通行が激しいわけでもなく、通行を完全にカットしても特に支障の出る地域ではない。そういう意味でも環境整備事業は着手し易いのである。手順としては、太鼓槽の南側あたりまでの外堀全体を埋める土砂を取り除くべきであろう。調査で明らかになったように、おそらく堀の石垣は3段くらい残っているであろう。併せて三の丸側の生活面レベル(石垣の天端レベル)を再度確認することによって三の丸側の石垣修理を実施すべきであろう。また、外堀の終端部がどのようになっているか、どういう施設・構造によって堀の水が大松前川へと導かれているか確認しなくてはならない。

調査では外堀ばかりではなく三の丸側の諸施設、特に馬坂門の正確な位置と規模を確認することは急務であろう。復元の可否は別にしても、門の位置を割り出さなければ基だ締りのないものになってしまうからである。このほか堀際の櫓列、御番所、御鉄砲置場、五番から七番ま

での台場を明らかにし、可能なものは地上復元なり表示を考慮すべきであろう。また、架橋部に架かる橋がどういう構造、材質であったか、史料の検索を進めなくてはならない。これは縄張図にもあるように、この付近に架かる2ヶ所の橋の表現方法が異なっているからである。二の丸へと向かう橋は木橋であるように表現されているが、もう一方は木橋ではなく別の素材であるようにも見える。石橋であったようにも考えられるが、石橋を含めて今少し史料を見る必要があらう。

三の丸側に対し二の丸側の調査は少々難しい。縄張図では、外堀に架かる木橋を渡って二の丸に入ると広い樹形となり、中央部には楕円形の土手（三本松）が設けられている。現在、三の丸地域とこの三本松付近では5m以上の比高差がある。町道馬坂線部分の調査結果を参考にしても、おそらく当時でもこの程度の比高差はあったとみられる。であれば三の丸と二の丸側とでは石垣の天端レベルが同一とは考えにくく、当然二の丸側がかなり高くなることは十分に予測できる。事実、今回の調査結果でも三の丸側よりは少なくとも1mは二の丸側の石垣が高いと推定したところである。だが、この数値はあくまでも部分調査の結果によってであるから、実際にはどの程度の石垣天端レベルの差か、樹形部分を全面的に調査して決定すべきと考える。この樹形の調査によって、前述した修理予定箇所延長部石垣、搦手門、虎口部分、三本松の南側の石垣の位置も自から把握できてくる。また、木橋の位置も確定されてくるであろう。

更に太鼓櫓及びその周辺の調査も重要である。太鼓櫓そのものの位置、規模を確認することは勿論大切であるが、縄張図でも分かるように、外堀の太鼓櫓側は前述の樹形部分よりは石垣がかなり高くなる筈である。これがどの程度のレベルで押さえて行けば良いのかを確定しなければ石垣の修復は難しい。太鼓櫓付近は道路（町道外濠1号線）の開削によって旧地形がかなり改変されているとみられ、石垣の天端レベルを決定するには太鼓櫓周辺だけの調査のみでは判断しかねるかもしれない。場合によっては、大手門周辺にも部分的にトレンチを設定してみ、その結果をも勘案して決定すべきかもしれない。

本文中でE地点において石垣の「裏積み」の可能性について少し記しておいた。今回は工事中のこともあってそれ以上調査するまでには至らなかったが、もしもこの手法が用いられていたとするならば、北東側の隅櫓の基礎部分に施工されていた可能性が考えられてくる。実際にこうした技法が採られていたものか、採っていたのであれば太鼓櫓でも同様の技法を用いる可能性が極めて強い。今後の隅櫓部分の調査では「裏積み」の有無を念頭に置きつつ進める必要があらう。

遺物の中で「銅瓦」の可能性のある資料について紹介した。これは、一般的に見られる火鉢のような銅製品とはどうも趣を異にし、あるいは史料の中に見えてくる銅瓦かもしれないということで紹介したものである。築城時の城内の各建物の様子を伝える史料に「御新城縄張図」がある。この史料は過去に紹介してあるのでここでは掲載しないが、「銅葺」「瓦葺」の用語は出てくるが銅瓦という言葉は見えてこない。この用語が出てくるのは「北門史綱」巻十四の明治4年2月26日の条に「来ル三月ヨリ面金七箇宛被下旨昨冬及布告置候処東根代地海閑所復

旧之候得共未出納ノ正算不相分追テ治定ノ上給祿取極候ニ付先六月マテ面扶持三合ツ、且城門櫓等ノ銅瓦取外シ為御手当軒別五両ツ、被下候条窮迫ノ場合致測察各自家ヲ取締相立候様厚ク相勵此旨屹度体念可有之候事 右之趣及布告候、未二月」と「銅瓦」を削いで家臣の軒別に5両ずつ支給しているのである。明治4年ころの家臣の実数は詳らかではないが、嘉永6年(『御扶持家列席表』町史、史料編第1巻所収)では631名の士席登載者があり、維新时期に至って更に増加しているのである。軒数(世帯数)であるから仮りに500軒としても2500両と莫大な金額に達するのである。先の史料では体面を憚って「銅瓦」を「銅葺」と書き替えていたものが、一般的な銅板葺を「銅瓦」と呼んだものか、また、城門の銅製の筋金物等を「銅瓦」と呼んだものが定かではない。寡聞にして「銅瓦」とこれの葺かれた建物を知らないが、どのようなものを指すものか、福山城内で実際に葺かれていたか否か、今少し史(資)料の蓄積を待ちたいと思う。

3ヶ年の石垣修理工事によって、町役場裏手から見る福山城の景観は大きく変わりつつある。また、今年度には町道馬坂線の改良工事によって馬坂の南側の石垣積の側溝も復元された。大松前川に架かる橋を渡り、石垣を見上げながら一步一步城内へ向かう時、歴史の中に身を置き、追体験の場としての雰囲気が整いつつある。以上、遺構と遺物について若干のまとめを記したが、今後とも関係各位、機関のより一層のご指導、ご助言を賜わってこの事業を進めていく所存である。



修理箇所根石調査状況



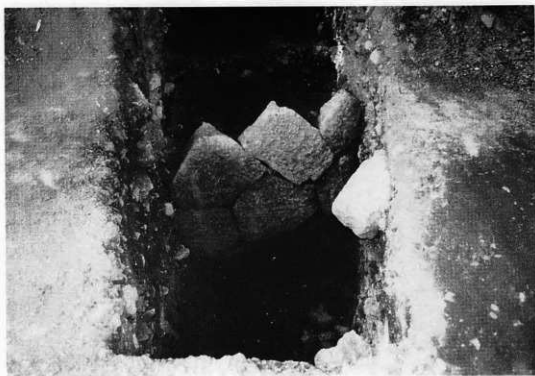
E地点根石調査状況



A地点



C地点



G地点 根石状況



H地点 根石状況



I 地点 横掘り跡の状況



J 地点 根石残存状況



E地点 石垣状況（南側より）



同上（東側より）



蛇口及び流し様の遺構（東側より）



同上（南側より）



ピット 1



E 地点石列



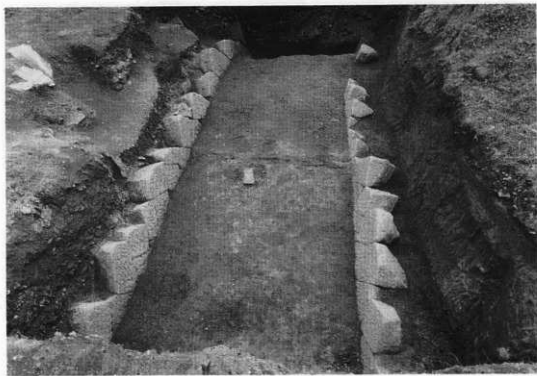
1 地点



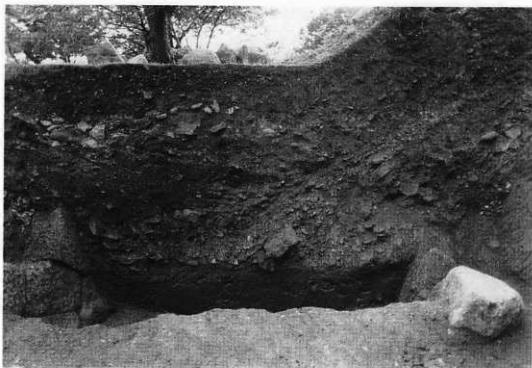
5 地点



外堀調査状況



外堀（北側より）



外掘埋没状況



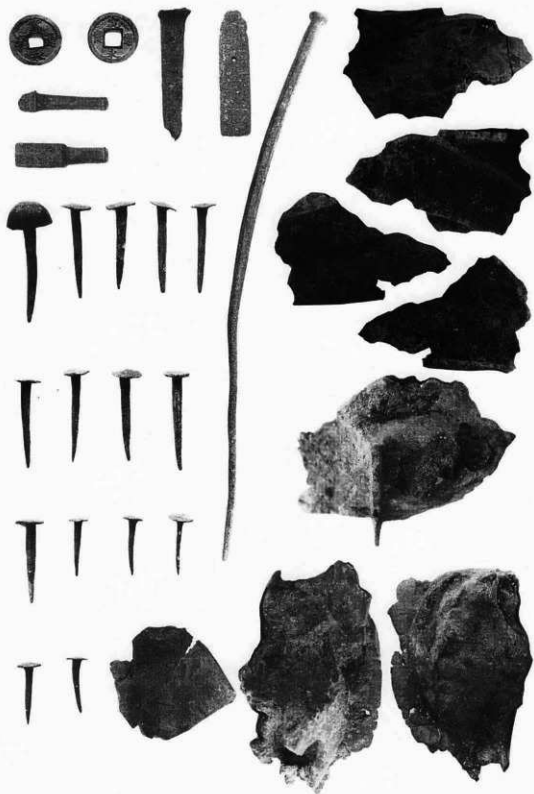
岩盤に見えるタガネの痕跡



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

史跡 福山城 IX

平成3年度
発掘調査概要報告

発行 平成4年3月20日
発行者 北海道松前町教育委員会
印刷 カジヤ印刷

史跡福山城Ⅸ
平成 3 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 2 月 20 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城Ⅸ 平成 3 年度 発掘調査概要報告
(1992 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。